

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第198号

イザヤ 65:1

平成24年3月30日

明るく日、ペテロは、立って彼らといっしょに出かけた。ヨッパの兄弟たちも数人同行した。その翌日、彼らはカイザリヤに着いた。コルネリオは、親族や親しい友人たちを呼び集め、彼らを待っていた……ペテロは…コルネリオとことばをかわしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て、彼らにこう言った。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです……神はかたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です……神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざを成し、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました……イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きています者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです……

ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので、驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにならざるべきでしょうか。」そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるようにと彼らに命じた。使徒の働き 10:23-48

先月号で、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」(ヨハネ 3:5)を、母の胎からの自然の誕生と、誕生後の聖霊による生まれ変わり、すなわち、新生への言及とみなさないで、水と聖霊によるバプテスマへの言及とみなし、バプテスマを救いの条件と主張する教派があることに触れましたが、聖書には、「水」が「神の言葉」を象徴するものとして用いられている箇所がいくつかあります。パウロは「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛なさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり……栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです」(エペソ人 5:25-27、下線付加)と、キリストが教会を愛し、御言葉によって聖め、ご自分の花嫁にふさわしく成長させてくださることを教えました。NIVほか英語訳では邦訳の下線部が「みことばを通しての水の洗い」でと訳されており、御言葉が水に象徴されていることは明らかです。また、新生に関してペテロは「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです……あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです」(ペテロ第一 1:23-25)と、御言葉による生まれ変わりを教えています。

しかし、聖霊による生まれ変わりが、水に象徴された「御言葉」による聖めを通して行われることがもっとはっきりと示されたのは、キリストご自身が弟子たちの足を洗うという、「洗足」の行為を通して語られたメッセージにおいてです。過越の祭りの前の夕食時、足を洗われることに躊躇したペテロにキリストは「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります」と答えられ、足を洗うことにキリストとの関係が象徴されることを知ったペテロは、「主よ。私の足だけでなく、手も足も洗ってください」と応答したのでした。この問答から、キリストが弟子たちに示そうとされたことが、足を洗うという物理的の行為を越えた象徴的な何かであったことは明らかです。物理的な行為が霊的祝福をもたらすというのではなく、その行為に霊的真理が象徴されていることをキリストは示されたのでした。このことは続けて言われた御言葉から明らかです。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みなさんがそうではありません」(ヨハネ 13:10)と言われたキリストは、この最後の晩餐の一連のメッセージの中で、さらに「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです」(15:3)と言われました。このようにキリストご自身が真理を明らかにされたように、キリストは、ご自分の御言葉による聖めを洗足という行為を通して教えられたのでした。言い換えれば、私たちが生まれ変わるのは、御言葉の聖めを通してであるということです。死すべき者、肉に生まれた私たちは、神の言葉によって霊に生まれ変わらなければなら

ないのです。先に引用したヨハネ3:5の聖句は、「この世に肉で生まれた人は、神の言葉と聖霊によって、霊に生まれ変わり、神の国に入る」と解釈することができます。水で洗われるという物理的現象に何か神秘的、超自然的な力が働いて、罪がぬぐい去られ聖められるとか、霊的な力が働くというのでは決してないことは、バプテスマという宗教的な儀式に関しても同様であることは明らかです。

水のバプテスマははじめ救い、新生（生まれ変わり）、聖めはすべて、キリストを信じる者にキリストの御名によって成されることが聖書の一貫した主張です。愛弟子ヨハネは、キリストが弟子たちの前で行われた奇蹟をはじめ、行為の一つ一つを書きしるすなら「**世界も、書かれた書物を入れることができまい**」（ヨハネ 21:25）と思われるほどにたくさんあるが、ヨハネの福音書を書いた目的はキリストの奇蹟を告げるのではなく、「**イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである**」（20:31）と、キリストを信じる信仰による救いを告げ知らせるためであることを強調しました。ちまたの諸宗教はさることながら、カトリック教やキリスト教界の中にも、象徴にすぎない儀式に神秘性、重要性をもたせ、その過程で霊的な力が働き、水、パンやぶどう酒のような普通の物質が、罪を赦したり、癒しを起こす力の源に変えられるというような解釈をしている教派がありますが、聖書はそのような主張を裏付けてはおらず、肉の思い、発想にすぎません。そのような儀式を繰り返すことによって、宗教に特有な人間的な満足感を得られるかもしれませんが、キリストによる神の救いとは関係がないのです。聖書が語るキリストによる救いは非常に簡潔で、聞いた神の言葉を信じる者に、神が与えてくださる無条件の賜物です。

日本でも幼児洗礼という名のバプテスマを授けている教会がまだあるようですが、人の発想、願望が信条になった典型的な例の一つです。幼児洗礼の賛否が問われるとき、根拠となる聖句として取り上げられる二つの箇所があります。冒頭に引用したローマの百人隊長コルネリオの家族の救いは、その一つです。ペテロの到着を待っていたコルネリオの家族、親族、友人たち「**すべての人々**」がこの日、全員救われるという出来事が起こったのですが、救われた家族の中には赤子、幼児も含まれていたに違いないという仮定が幼児洗礼を正当化する理由になっているようです。しかし、用いられている表現を注意深く吟味すれば、たとえ家族の中に幼子がいたとしても、救われた「**すべての人々**」の中に入っていないことは明らかです。コルネリオはペテロを家に迎え入れたとき、「**いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております**」と、自分の家に多くの者が集まった理由を「神の言葉」を聞くためであると明確に語りました。それに対し、ペテロはキリストによる救い、福音を語り、「**神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられる**」こと、また、「**この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる**」ことを告げたのでした。そのとき「**みことばに耳を傾けていたすべての人々**」に、聞いた御言葉を理解し、受け入れたことにより、「**聖霊の賜物が注がれ(る)**」という現象、聖霊による生まれ変わりが起こったのでした。まさに、ペテロを通して語られた「神の言葉」が、集まっていた人々に霊的な変化をもたらしたのであり、明らかに救いの対象は御言葉を聞き、理解した者たち全員で、幼子たちが含まれていないことは言うまでもありません。パウロは聖霊が、あのペンテコステの日にキリストの弟子たち、ユダヤ人信者に下されたと同じ「**異言**」の賜物を授けることによって、紛れもなく承認されたこれら異邦人の信者たちに、ユダヤ人、異邦人の差別なく「**どの国の人であっても**」、キリストの名によるバプテスマを受けるようにと命じたのでした。

根拠として用いられるもう一つの箇所は、使徒の働き 16章に記されているマケドニアの植民都市ピリピの看守の家族の救いに関する出来事です。パウロとシラスが町をかき乱しているとのあらぬうわさで捕らえられ、ピリピの牢に入れられた日の真夜中ごろ、大地震が起こり、獄舎の戸が開き、囚人たちの足かせの鎖が解かれるという一大事が起こりました。囚人たちが逃げたと思い、その責任を取って自殺しようとした看守を二人が助けたとき、看守は魂の救いを求めました。それに対する二人の返事「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」（下線付加）を、家族のかしらの意志が幼子の救いに反映されることを裏づけている聖句とみなし、幼児洗礼を支持する人たちが根拠にする箇所ですが、この文脈は洗礼については何も語っていないことがまず指摘されなければなりません。むしろ、この文脈で著者ルカは「**そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った**」（32節）と、パウロとシラスが福音を語り、それを理解して受け入れた家族の者すべてに救いが起こったと語っているのです。御言葉を受け入れた対象に幼子が含まれていないことは明らかです。その夜、御言葉を受け入れたすべての者、すなわちキリストの福音を信じた者に、水の洗礼が授けられたのでした。

多くの教派が施している幼児洗礼は、授けられた者、一善悪も、右も左も、福音の理解も分からない幼子—「生まれ変わり、罪の赦しを受け、バプテスマを通して神の子となった」ことを宣言する公の儀式なので、多くの問題をはらんでいます。自分の理解、意志とは無関係に幼児洗礼の証明書を与えられた者が、成人したとき堅信礼の儀式を受けて教会員になることができるという教えは、明らかに聖書が証する福音、キリストによる救いとは無関係で、人の設立した宗教団体、教会の教則、信条にすぎないのです。「神の子」としての偽りの証明に安住し、自ら神との関わりを持たない人生は、純粋な福音に照らすとき、実際には救われていないということなので、むしろそのような洗礼を授けられた者を大きな自己欺瞞に陥らせることになり、非常に危険なのです。